

19	安城	丈山小学校	カベヤ ケンタ 名 前 壁 谷 謙 汰
分科会番号	3	分科会名	社会科教育 (小学校)

研究題目

主体的に課題解決に取り組み、自信をもって考えを表現する子の育成
～社会科「目指せ自動車づくりマスター」の学習より～

1 主題設定の理由

本学級の児童は、行事や委員会のチームにおいて、やってみたいと思うことがあると進んで取り組もうとする姿が多く見られる。しかし、授業では、どのように取り掛かればよいかが分からずに手が止まっていたり、とくに聴き合いの場面では、気付いたことを発表するだけにとどまってしまい、級友と意見をつなげて考えることができなかったり、自信がもてずに級友の考えを聴いているだけになってしまったりして、困ってしまった様子も見られた。そのため、主体的に聴き合いに参加できるように、単元を通しての見通しをもたせたり、自分が知りたいことを基に課題の設定を行ったりすることで、課題解決に取り組むための手がかりを提供し、児童に自信をもたせたいと考えた。

そこで研究テーマに迫るために、単元「目指せ、自動車づくりマスター」を設定し、自動車生産の工程を学習するだけでなく、「なぜ」「どういった目的で」「誰のために」に重点を置き、自ら課題をもつこととして、考えを表現する場を設定することで、自分の考えをより自信をもって他者に伝える力を高めてほしいと考え、本研究主題を設定した。

2 研究の概要

(1) 目指す児童の姿

主題を受けて本研究で目指す児童の姿を次のように設定した。

課題を自分で設定し、主体的に課題解決に取り組み、自信をもって表現し学びを深める姿

(2) 研究の仮説と手立て

主題に迫るために、以下のような仮説を立てて、研究を進めることにした。

【仮説 1】

社会科「めざせ、自動車づくりマスター」の学習の中で、教師が課題提示やその取り組み方の工夫をすることで、児童らは労働者の工夫や努力を身近な生活と関連付け、主体的に課題解決に取り組むことができるようになるだろう。

【仮説 1 の手立て】

- 1 児童が意欲的に取り組むための単元計画を作成する。
- 2 児童が単元を身近に感じるとともに、自ら課題をもたせるための導入の工夫をする。
- 3 児童によるまとめクイズの作成やその問題を出す場を設定する。

（３）仮説の検証方法

本研究では、５年１組３２名を研究対象としている。児童の学習の様子やマイノートによる振り返り等の記述内容から学びの変容を追っていく。さらにその中から抽出児童を設定し、仮説の有効性を検証する。

【仮説 2】

社会科「めざせ、自動車づくりマスター」の学習の中で、自分の考えの根拠を表しながら発表する場を設けることで、子どもたちは相手に分かりやすく伝える工夫をするようになり、活動に自信をもって表現し、学びを深めていくだろう。

【仮説 2 の手立て】

- 4 まとめる視点を設定する。
- 5 資料の読み取りトレーニングの場を設定する。
- 6 学びを深める場を設定する。
- 7 思考を整理するために、マイノート（ワークシートを一冊にまとめたもの）を活用する。
- 8 児童の考えが一目でわかる板書や掲示の工夫をする。

<抽出児について>

抽出児 A は、どの授業も黙々と取り組み、進んで問題を解いたり、ノートにまとめたりしようとする姿が見られる。しかし、目の前の課題に興味をもてなかったり、級友と課題に取り組むときには手が止まってしまったりする姿が見られる。また、全体発表の場になると、ノートに自分の考えが書いてあったとしても、学級全体の前で発表することへの自信のなさから、なかなか挙手することができない。

そこで、課題を自分で設定し、労働者の工夫や努力を身近な生活と関連付けたり、自分の考えを確かなものにしたりすることで、自分の考えに自信をもち、主体的に聴き合いに参加し学びを深めてほしい。

3 実践

（１）課題を自分で設定し、主体的に課題解決に取り組む姿を目指して

① 児童が単元を身近に感じるための導入（手立て 1）

はじめに自動車について児童が身近に感じられるように、2024年度の自動車の販売台数の

資料を提示した。児童は資料から、トヨタは世界中で販売されていることに気付き、なぜなのかという問いをもつに至った。また、教科書の資料を提示することで、児童は地元愛知県で自動車生産が盛んなことを読み取った。多くの児童から「自分の家族がトヨタ系列の工場で働いている」といった反応もあり、身近な暮らしとつなげて考える姿が見られた。



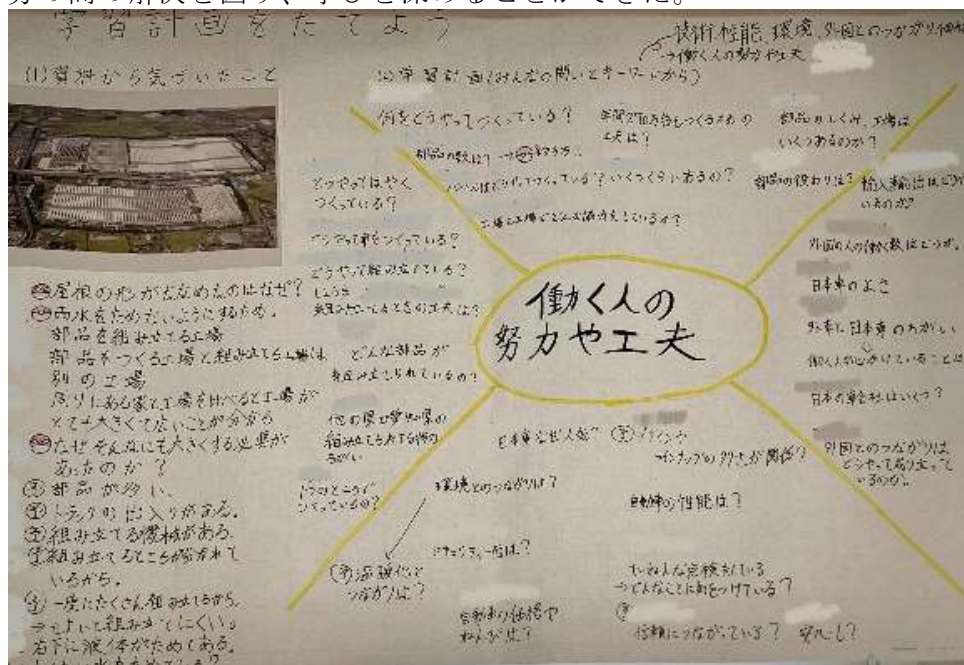
(写真1 自動車を見て気付いたことや問いを出す児童)

次に、自ら課題をもたせたり、疑問をもたせたりするために、車の細部まで観察できる場を設定した。(写真1)車はいつも見ているはずなのに、外見をよく観察したり、実際に乗車したり、いろいろなボタンを押したりする中で、児童は「部品の数がいくつあるのか」や「どのように組み立てているのか」、「自分の家の車と比べてどうか」など個人でさまざまな問いを生みだすことができ、自動車について興味をもち、自ら課題をもつきっかけとなった。

② 児童が意欲的に取り組むための単元計画の作成(手立て2)

児童の問いを取り入れた単元を計画したことで、主体的に課題を解決しようとする姿が多くみられるようになった。(写真2)単元目標を「自動車づくりマスターになろう」と設定し、児童に身近なアニメを想起させた。「分かったこと=ゲットしたこと」とすることで、意欲的に調べ学習やまとめ学習をすることができるようにした。

協働的な学びの時間には、ゲットした知識や問いを級友と共有し、級友から学んだことをもとに、自分の問の解決を図り、学びを深めることができた。



(写真2 児童の問いを取り入れた単元計画作成)

③ 児童によるまとめクイズの作成（手立て3）

毎時間、児童が学んだことなどを基にクイズを作成し、次時の導入で発表するようにした。児童が主に教科書の内容からクイズを作成するため、基礎の定着や理解を深めることにつながった。また、教科書の内容をもとに、さらに追究し、「なぜそうなるのか」や「どういった目的で」といったところをクイズにした。抽出児Aを含む複数の児童がそうすることで学級全体の課題に対する理解を深めるとともに、新たな課題をもち、意欲的に取り組む姿につながった。

④ まとめる視点の設定

自信をもって伝えられるようにするために、調べたりまとめたりすることの視点を設定した。抽出児Aのマイノートを見てみると、児童の問いから立てた単元計画（写真2）から、「技術」や「環境」などをキーワードとして取り上げていた。学びたいことや学んだことをキーワードごとに分類することで、抽出児Aが級友に発表する際にもキーワードのつながりで発表する姿が見られた。

⑤ 資料読み取りトレーニングをする場の設定（手立て5）

授業の導入時に、本時の問いにつながる資料を提示した。その際に、「気付いたことからどう考えたのか」や「どこからそう考えたのか」、「どのような繋がりがあるのか」という視点を示した。その後の学習ではノートにまとめるときや発表するときに、視点を絞って資料などを読み取り、自身の考えをまとめる姿が見られた。資料1の対話の後に抽出児Aは黒板に図を描きながら全体に発表していたことから、自信をもって発言できたことがうかがえた。

児童X	「資料をみて、細かい部品をつくる工場と組み立てる工場はそれぞれ違うと予想しました。」
教師	「Aさんの考えに繋げて発言する人いますか？」
抽出児A	「僕もXさんと同じ予想をもったので気になって調べました。Aさんの予想は正しくて、それはピラミッド型分業構造というらしいです。」

（資料1 第5時授業の様子から抜粋）

⑥ 学びを深める場の設定（手立て6）

児童の問いや予想を検証する場として地域のデンソー工場の見学を活用した。その際、児童の問いを事前に工場の方に送っておくことで、工場の方が児童の知りたいことに焦点を当てて質問に答えてくださり、より深く学ぶことができた。また、説明を聞いたり、体験したりすることで、進んで新しく発見したことや問いについて積極的に質問したり、ノートにまとめたりする姿も見られた。抽出児Aもその場で疑問を思ったことを進んで質問したり、マイノートのページを増やしたりしていくなど意欲的な姿が見られた。

また、資料2の児童の手紙から、これまでに学んだことと工場見学が結びついており、学びを深めることができたことがうかがえる。



(写真3 工場見学で学ぶ児童)

デンソー高棚工場みなさんへ
この間は工場見学をさせてくださりありがとうございました。社会で勉強したことがより知れてうれしかったです。デンソーの人は環境に対してすごくこだわってお仕事をしていることが分かりました。バナナでPONもすごく楽しかったです。これからもお仕事がんばってください。

(資料2 児童Aのお礼の手紙より)

⑦ 思考を整理するためのマイノートの活用(手立て7)

単元計画を立てた後、ワークシートを1冊にまとめたノートに「マイノート」として配付した。マイノートに学んだことやクイズなどを書きこみ、視点を児童が考えたキーワードに絞ることで、どういった考えや問いをもっているのかをその人のノートを見たら一目で分かるようにした。抽出児Aもグループ間で聴き合いをするときには、そのノートを基に聴き合いを行い、「似た考えでも根拠が異なる」など自分の考えをしっかりともち、級友の考えと比較しながら聴き合いを行うといった姿も見られた。



(写真4 マイノートを基に聴き合う抽出児B)

⑧ 児童の考えが一目でわかる学びの足跡の工夫(手立て8)

単元計画及び、「学びの足跡」を教室に掲示した。目的は見通しをもつことや学習の補完、発表時の活用だったため、教師が作成する予定だったが、抽出児Aを含む児童らがその日の板書や級友の意見を参考にしながら自分で作成したいという思いをもち、意欲的に作成する姿が見られた。また作成時には「どんな掲示だったら見てもらえるかな」と問うことで、考えた問いやキーワードを基に分類や色分けを行った。これを掲示することで、学級全体で発表するときには、前時と本時のつながりや自身で興味をもったことを、学びの足跡を活用しながら発言する姿が見られた。



(写真5 児童が作成した学びの足跡)

4 研究の考察と反省(今後の課題)

児童が課題を自分で設定し、主体的に課題解決に取り組むためには、課題との出会わせ方(手立て1、2)が特に大切だと考え、実践した。児童は、単元の導入から自身で課題をもち、「課題を解決したい」、「共有したい」

と毎時間、意欲的に取り組んでいる姿が見られた。また、自信をもって相手に伝えることができるようにするためには、視点を与えることが大切だと考え実践した。そのため、児童は常にどこからそう考えたのか根拠となる部分を意識することができ、自信をもって伝えることができる児童の姿が増えてきた。さらに、キーワードに着目させ、問いと予想をたてることで級友の考えとの相違点を見つけやすくなり、人との関わりを生むことができた。

児童Aの変容を追っていくと、初めは級友と聴き合いをする際に言いたいことが言えずに戸惑っている姿もあったが、マイノートのページが増えたり、周りの級友の課題に対しても調べ、伝えたりすることで、自分から級友に関わりに行く姿が増えた。また、全体の聴き合いにしても、級友の発表のよいところを自分の発表にも生かそうとする姿が見られた。単元が進むごとにマイノートも分かりやすく、詳しくなり、聴き合いでも生かすことができた。

反省点としては、まず児童が知りたいことを調べる時間を十分に確保できなかった点である。教師が時間数を気にしてしまい、知りたいことの方角性がずれてきた際には教科書の内容に寄せてしまったり、級友の考えで気になったところを追究させたりするように個別で指示をしてしまった。その結果、本当に調べて分かったことが調べられずに終わってしまう児童ができてしまった。これから実践する際は、児童が知りたいことを調べ、まとめる時間をきちんと確保していきたい。次にキーワードによって視点を絞りすぎた点である。視点を絞ることで、見やすさや考えやすさ、発言のしやすさ等で効果があったと考える。一方、児童が真に知りたいことと違う場合もあった。今後は児童の実態によって単元内でキーワードを使い分けたり、明らかに外れてしまうときのみ教師がそれを把握して視点を与えるとよいと思われる。今回、手作りのマイノートを通して紙でまとめる良さを感じたが、児童Aなどこだわっている児童ほど紙がぼろぼろになってしまっていた。児童は満足していたが、デジタルで似たようなことはできないか模索していきたい。また、児童Aがまとめた学びの足跡を発表にもっと生かせたと考える。学びの足跡は、学びを振り返るためだけに使うのではなく、より学びが深まるようなノートの書き方の工夫をしたり、学びを生かす発問の仕方を身に付けたりしていきたい。

これらの反省を生かし、単元全体の見通しをもちながら授業を組み立て、児童が主体的に他者と関わりながら考えを深められるような授業を目指していきたい。また、今回の授業研究を通じて、自分の言葉で考えを他者に伝えることがまだまだ苦手な児童がいると感じた。普段から自分の考えを他者に話すことを他教科でも意識して行うことで、聴き合いの活動を通して他者に伝える力を高めていきたい。

実践を通して、自分の目指す授業を可能にするためには、普段の学級経営がとても大切だと分かった。児童が過ごす毎日を充実したものにするため、これからも話すこと、聴くことを大切に、児童が自分の考えを伝えたいような学級経営を心掛けていきたい。日常生活や授業において、主体的に課題解決に取り組み、自信をもって考えを表現する児童の育成に力を入れていきたい。